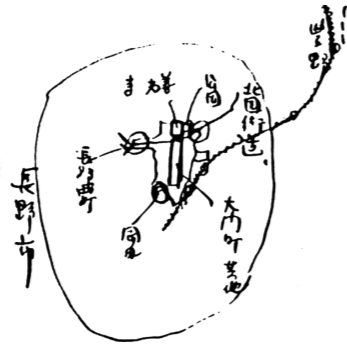
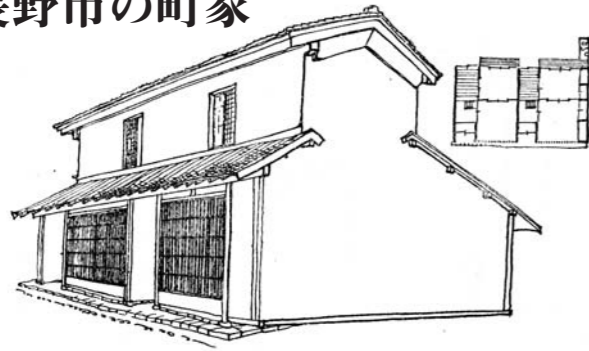


発つ た

大阪市立大学大学院工学研究科都市系専攻 建築デザイン研究室

日本の民家再訪ゼミ/講師 中谷礼仁 前期博士課程 米田沙知子 学部四回生 石垣敦子
船橋耕太郎 久保響子 堀野敏

長野市の町家



長野の市は善光寺さまの本堂が南を向いて最北に位置している前へ延びて出来ている。そして裾花川からひかれた流れはそれらの街を横切って火災の時にははぶる役立ててくれるように流れている。学校や刑務所、官庁等はこの大通を中心としたところからはいくらかはなれて建てられていて、その附近にはいくらか東京風の住宅も建てられているのが見られる。が、それらの部分を除いた長野市の大部分の家々はこの図に見るような土で塗りこんだ家並をなしている。特に目に立つのは、妻のところから両方に目隠しの壁がついているのが沢山ある事である。壁の土は黄色くて目につく。格子や柱等をベニガラ塗りにしているものもある。この造りは火災のために出来たのだと思うが、造りや色のせいで、夏は暑苦しく感じられる。

「日本の民家」二九 長野市の町家 (p.187)

出典=今和次郎『日本の民家』(岩波文庫 1989)・左側
同書『見聞野帖』(柏書房 2000)・右側



1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

今の日記を参照し、善光寺南方の大通りから出発する①。通りに店を構える「茶房・夢屋」で軽食を済ませ、大正期の町並や今のスケッチについて質問をする②。当時の街並が残っているのは善光寺付近と、権堂町だそうだ。まずは善光寺の西側にある西長野町へ向かうことにした。

西長野町の道端で原山さんという方に出会った③。今の描いた町家にそっくりの原山家では、町内会議の最中にもかかわらず、このスケッチに関して対応してもらった④。現在では岩石町と大門町に古い町並が残っており、以前は西長野にも町家が多く残っていたらしい。原山さん曰く「そんな話ならコウモリ屋さんが詳しいよ。」とのこと。途中、手の加えられた町家群を横目に見ながら⑤、コウモリ屋さんと「三河屋洋傘店」へと向かう。店の主人の話では、この付近全てが今の描いた町家だったらしい。しかし1979年の大火災によって取り壊され、現在にみられる新築が並ぶようになった。ところでこの洋傘店は明治10年の創業で、店内には珍しい洋傘が多く並んでいる。なかでも二万円の英国紳士のステッキ傘は主人自慢の逸品だった⑥。

これまでで紹介された、岩石町、大門町から権堂町へと抜ける。付近には当時の町家が残っているものの、それらほとんどに増改築の跡が見られる⑦⑧。その後、今の道行をなぞるように長野市内を見て回ったが、町家がずらりと並んでいた当時と比較すると、その面影はほぼ残っていなかった⑨。

再訪『日本の民家』
考現学の創始者として知られる今和次郎(1888-1973)は、34歳の時に『日本の民家』(1922)を上梓した。5年をフィールドワークに費やした本書は、日本近代初の「民家」の紹介の書であった。民家を中心とし、今自身によるスケッチを織り込みながら、日本の生活文化のありようが多層的に語られている。あの民家、あの周囲の人々、モノたちは、現在どうなってしまったのだろう。私たちは、今和次郎が採集した「日本の民家」を再訪し、その2005年の様子を今と全く同じように採集しようとする。

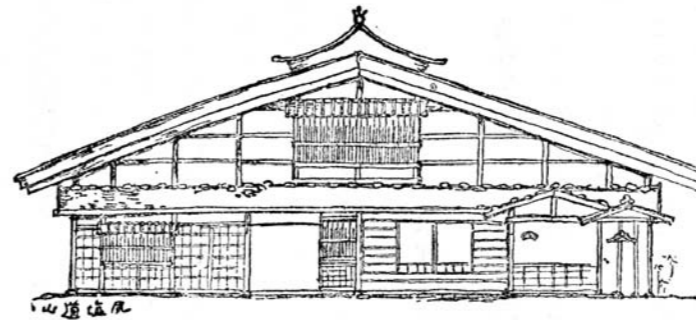
うとしている。この間日本に何が起こったのか。つまりは88年後の日本の定点観測を行っているのである。

今回の第一回目『日本の民家』再訪では、採集29の「長野市の町家」と31「木曾街道の豪農の家」を採集した。これらを比較、分析することでそれぞれの変化の違いについて述べたい。

「長野市の町家」
町の人々によると以前は今のスケッチと同形の町家がずらりと並んでいたそうだ。しかし現在は、市街地化により町並みは大きく変化していた。実際私たちは、その形の町家を探そうと、町の人々に紹介されながら市内を転々としなければならなかった。この町にはここならでのネットワークが存在しているようだ。今の時代には一つだった町家の形態も現在は、町並みや内部の変化に伴い、形が残っているもの、増改築などにより変容するもの、全く無くなるものなど様々な形に変容していることがわかった。

八八年後を歩く～流浪の今和次郎ゼミ

木曾街道の豪農の家



所は堀尻の旧宿場で、昔からの豪農の家である。裏に間取も姿もがっちりした立派な建物である。この家は農業をやっているのが宿屋ではないのだが、土地の豪家なので、昔は相当な武家や、公卿たちを泊めたものだそう。そのつもりでこの家の間取を説くと、自ら風韻が受取れて来る。まずその堂々たる玄関前の式台構えにうたれる。それからそれにつく上座敷として、そこへ泊った米客のための風呂と便所、特にその便所は六尺に五尺というとりかたであるが、これも定石である。ひっそり板戸で仕切ったうらには、オコという大広間があるが、ここは家の人たちの生活の場所で、また一般外来者への応対所でもあるが、広い土間をも包含して、台所もが、がらんとした中に構えられているのである。そして大きな屋根を支える見事な梁が、一間間隔に走っているのがここで見上げられるのである。こせこせしない山国の人々の豪放な気性が、ここでしみじみと感じられるのである。

「日本の民家」三一 木曾街道の豪農の家 (p.195)

出典=今和次郎『日本の民家』(岩波文庫 1989)

今の訪れた豪農の農家は現在、重要文化財「堀内家」に指定(昭和47年)されていた。この所有者である堀内氏によると、「堀内家」は本棟造りで真ん中が暗くなるため、以前あった中二階を取り除いたり、馬小屋だったところを料理場にしたりなど、昔は住みやすくなるために色々改築していたようだ。重要文化財に指定された現在、今が訪問した時代から外見はおおむね平面でさえもほとんど変わっていないことがわかった。家族形態の変化、地主制度の廃止、ガスや水道の普及などにより生活は大きく変化したにもかかわらず、重要文化財に指定されたために「堀内家」は昔の姿をそのまま残し続けなければならなかった。堀内氏は重要文化財指定後、3年ほどはこの「堀内家」に住んでいたそうだ。しかし、現在は隣に新しく管理家を建て、そこで暮らしている。



堀内家住宅

堀尻の変遷 (明治43年) (昭和37年) (現在)
中山道①は堀尻宿に通じる街道として江戸時代に開通し、駅前②の開設と同時に市街地の中心が堀尻から大門③に移り、この当時は堀尻が市街地の中心④として栄えていた。動。旧中山道に替わり太く大きな新中山道⑤が開通した。更により新しく鉄道⑥と高速道路⑦が開通。ますます大門が市街地化する。

「木曾街道の豪農の家」
今の訪れた豪農の農家は現在、重要文化財に指定(昭和47年)されていた。今と同様、内部の見学、スケッチを行った。調べていくうちにこの家は、生活や周りの環境の変化(上図)にも関わらず、外見も内部も全く変化していないことがわかった。周りから影響を全く受けていない姿を保ち続けることは、管理家を新たに建て、家主はそこで生活をしていることなどを考えると、とても大変であることを知った。「堀内家」は、このような大変な管理の元、昔の姿を保ち続けることができるのである。

「てぶくる」と「ちいさいおうち」
周りに変化に伴い刻々と変化し続ける長野の町家。周囲が変化していく中で一つ残り続けた「堀内家」。88年前には同じ「日本の民家」として記述されたこの二つは、88年経った現在、それぞれ違った変化を遂げている。それはまさしく現代版「てぶくる」と「ちいさいおうち」といえるのではないかと。今後今この「日本の民家」を追体験することによって、新しい「日本の民家」を採集していきたい。

「てぶくる」
雪の中に落ちていた手袋に次々と動物が住み込んでいきました。手袋は動物が入る度に次第に家らしく変化していきました。

「ちいさいおうち」
田舎に小さいお家が軒建っていました。周りが次々と開発されていく中、この小さいお家はそのまま建ち続けていました。

